

講演4

「躍動するアジアと 21 世紀の日本—日本はアジアを越えられるか」

東南アジア研究所教授 濱下 武志

<はじめに>

「躍動するアジアと 21 世紀の日本—日本はアジアを越えられるか」というのは、金文京先生の表現をお借りしますと、看板にかけた文字でありまして、中身としましては、私は今まで日本がアジアを越えようとした、あるいは越えたと考えてきたという、日本のアジアの中の位置づけというのでしょうか、あるいは日本をアジアの中でどのように位置づけるかということについて考え直したいと思っています。そしてそれを幾つかの角度から、主に歴史と現在を対比する形で考えたいと思っています。

午前中のお話で、河田先生は、水は昔を知っているとおっしゃいました。私もそのとおりだと思います。今日の私はアジアの海の歴史ですが、海はアジアの歴史を知っているというように考えてみたいと思っています。

それから、佐和先生は、例えば構造改革という言葉を一一般として考えるのではなく、どういう時代の条件で、どういう担い手で、どういう具体的な内容であったのかということを考える必要があるということ、それを歴史の条件とおっしゃったと思います。

私も現在の日本と東アジア、あるいは日中関係を中心とする日本と中国という問題を、金文京先生のように長い歴史ではありませんが、少なくとも 19 世紀半ばからの中国の開港といわれる事態、あるいはアヘン戦争以降の清朝末期から現在までの 150 年間、これはちょうど日本の明治維新から現在までの 150 年間に対応すると思いますが、その過程で、中国が欧米との関係あるいは日本との関係で経験してきた問題、さらに 49 年の社会主義革命以降、その後 70 年代末からの改革開放政策の開始という形で、また最近では 1998 年の WTO 加盟という形で世界に積極的に開きながら、改革開放を推し進めている。また、中国の知識人が、日本、アジアあるいは世界に対して持ち続けてきた、例えば魯迅の時代観に象徴されるような、列強からの侵略や圧力という鬱屈した、大変内こもった、これまで 150 年間の対外関係が、現在、非常にオープンに、すべてにわたって思い切り発言しているという状況があります。これは中国の近現代史から見ますと、150 年間なかったことともいえます。

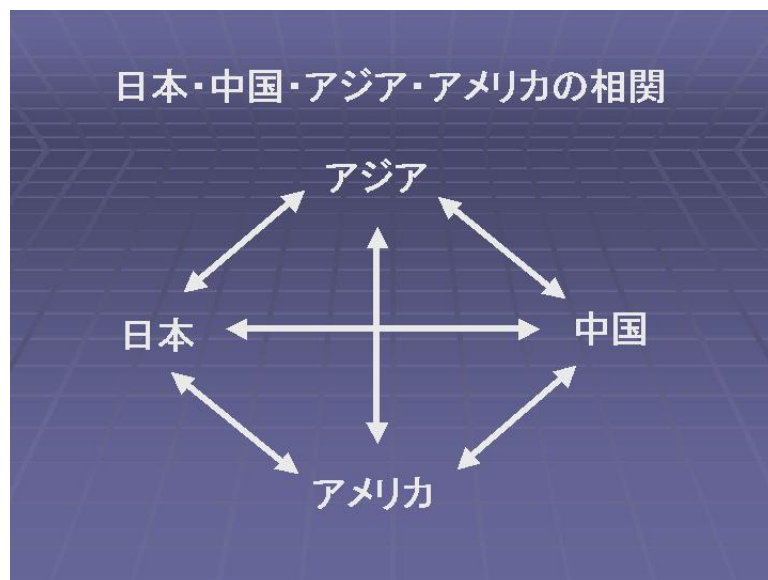
さらに華僑・華人の問題があります。これは外側の中国ともいわれるわけですが、今まで中国大陆、清朝・中華民国・中華人民共和国の時代を問わず、また現在の香港、台湾と華僑・華人の関係であれ、内と外に相互に違う立場を取ってきたという歴史がある中で、今ほど一体となって、ある意味では本体と海外華僑・華人が一つの方向に向かっているという時代はないと思います。

そういう意味でも、また一つの歴史的な条件として現在というものがあると思いますし、本体と海外という場合でも、例えばアメリカで博士号を取得し高度な技能、知識を持った人たちがアジアに戻ってきて、本国だけではなく、例えばシンガポールでコンピュータプログラミングに取り組む、積極的にベンチャー企業を興すというように、いわば頭脳の回流という形です。かつてのクーリー貿易に見られたような植民地のもとでの労働力の移動という観点ではなくて、むしろ積極的に中国あるいは中華、さらに大国という意識を前面に出しています。このように、海外の華僑・華人の流れと本体の流れが一つの方向を向いている。こういう中で生まれてきた現在の中国圏のエネルギーであると思います。

<中国の脱亜>

この中国をどのように位置づけたいか。図表 1 は中国と象徴させましたが、東アジアと考えたときに中国、韓国、あるいは東南アジアとどのように関連づけられるのかという形で、日本、中国、アジア、アメリカの 4 者の相関関係を少し見てみたいと思います。これは、日中を議論する場合でも、この 4 者間のすべての方向で、今どういう問題が起こっているか、何において関心があるかということを見ていく必要があると思います。

最近の事例では、戦後、日本文化の型について書かれたルース・ベネディクトの『菊と刀』という、ヨーロッパの罪の文化に対し日本の恥の文化という形で、日本の社会文化の型、日本人論を問題にした本がありました。このルース・ベネディクトの『菊と刀』が中国語に翻訳されて、ここ 1～2 年中国の大学生の間でベストセラーです。中国の大学生が日本の社会に対して、アメリカ経由の異文化論のチャンネルで関心を持っているということもとても興味深いところだと思います。



図表 1

日中韓、あるいは東アジアというときに、国家（国）を中心として考えるということは現在前提ですが、同時に社会あるいは文化についてどう考えるか。中国の大学生は、かつて胡耀邦の時代に日中 3000 人交流というものがありました。その人たちが当時、日本に対して大変関心を開いて、日本の文学、社会科学、自然科学の研究・勉強をして、現在非常に専門的な日本論が出はじめていると思います。

津田左右吉、桑原隲蔵、内藤湖南、丸山真男に関する研究や翻訳が出されたり、竹内好の翻訳が出たりという形で、これまで経済発展のモデルとして日本の第二次大戦後が関心の対象であった大学生・大学院生が、日本人論として広い関心を示しているということにも私はとても注目しているところです。

このルース・ベネディクトの『菊と刀』という本は 7 種類の異なる中国語の訳が出ています。2 種類は香港から出ています。1 種類は台湾から出ています。残りの 4 種類は中国から出ていますが、そのうちの 2 種類はグラビア入りというのでしょうか、さまざまな歴史写真あるいは絵画が使われて、あるイメージを問題にしています。

そういう点では、中国の日本人論、日本社会論という問題は、ある方向では深まっている。もちろん別の動きも非常に強くなっているわけですが、いわゆる反日という動きを見るにつけて、私はそちらの動きが強まれば強まるほど、やはりそうでない動きも同時に強まっていると思っています。実際、私の広州、上海、北京の経験におきましても、そういう点で、日本理解、あるいは日本を知ろうというところは、かつての 3000 人交流の世代の人たちが 20 年後の今になって、専門研究、専門書を出しているということに気づかされるわけです。

翻って現在の問題を考えますと、現在の状態がどうかということはもう少し時間を見なければいけないと思いますが、現在の大学生の世代が 20 年後にどういう日本論、日本社会論、あるいはアジア論を考えるかということでは、むしろ将来に不安な面もありますが、そういうある時代の幅の中で考えなければいけない事態だろうと思います。

そういうことを図表 1 の相関図から考えてみますと、中国はアメリカの戦後の日本理解、異文化理解としてのルース・ベネディクトの『菊と刀』に見られるような異文化理解のチャンネルを通して日本を議論しているという面の特徴があると思います。このことは中華文明、中国文化というものが大きな意味で東アジアを覆う考え方であったということに対して、もちろんそういう考え方は続いているにしても、異文化理解の対象としての日本という議論が今進んでいることは、一面、今後の対話、討論にとって、ある距離感覚を持った討論ができるということでは、新しい動きであろうと思います。同時に、この動きと平行して「中国論」「中国人論」が極めて盛んに議論されており、そのなかの日本論であると思います。

このことは、中国がアメリカのグローバリゼーションという回路を通してアジアあるいは日本に対応するということが考えられます。ある意味では、中国のグローバリゼーションの方向が現在の中国のナショナリズムと重なったときには、周辺に対して非常に大きな影響、圧力を与えるという構造になるということは考えられるところです。

先の金文京先生のお話の前半部分に、アジア、特に東アジアにおいて、主権国家が主権としての領土を厳密に線引きすることはできない。その背景には、王道・霸道という考え方（覇権を求めずに王権の徳の政治を行うという理念）があったからである。王道・霸道という一つの地域統治が、主権国家でも領域国家としての国境の線引きができない、あるいはそれを行うときにはさまざまな問題が出てくるというお話は、後に海洋の国境線についてもそのとおり現れているということを申し上げたいと思います。

その主権国家と領域国家の関係で、金文京先生のお話の後半ですが、王権あるいは朝貢冊封体制という地域秩序、地域統治の関係が非常に問題であるということが改めて確認できると思います。

49 年の社会主義革命の後、中国は一貫して覇権を求めない、つまり膨張主義を取らないという一種の排外孤立政策を取ってきました。近年、政治学あるいは国際関係の分野では、積極的に地縁政治という表現、ジオポリティクスという観点から地域統治の空間的広がりを強調する議論がおこなわれています。一方では、20 世紀初頭からのヨーロッパの世界覇権・海洋覇権というマッハンやマッキンダーの議論も積極的に引用しながら、中国は現在、地縁政治という形で、ある意味では主権を越えた、他地域あるいは他国家、複合国家という多様な観点から、これは先ほど金先生が一国二制度としてご指摘になったわけですが、そういう議論を積極的に展開しています。

そのことはグローバリゼーションに対応するナショナリズムが、方向としてはどんどん大きくなっていかざるをえない。これは中国本体としても、ナショナリズムがある意味では求心力を持

日本とアジアの相関

- ① アジアの中の日本
- ② アジアと日本
- ③ アジアとしての日本

図表 2

って全国を糾合するという役割を果たさなければならないときに、同時にグローバリゼーションという外に向かって大きく開いていくという政策が採られていきますと、この両者はどこかで問題が出されてきます。

それを政策の転換という形で切り替えてきつつあると思います。その点で、中国のアジアに対する、また日本に対する関係が、アメリカを経由した関係の中で示されていると思います。そういう中で私はアジアという問題を考えてみたいと思っています（図表 2）。

<日本のアジアアイデンティティ>

日本とアジアの関係をみますと、日本が歴史的に大きな社会変化があるときに、先ほどの中国の日本社会論と同じように、日本論や日本人論というものが出されてきたと思います。歴史的にはどこまで振り返るかということはあるありますが、例えば和辻哲郎先生の『鎖国論』などはやはり日本のアイデンティティをヨーロッパとどういう形で結ぶのか、鎖国という政策を取っていたがために、外の科学技術に対してドアを開けなかった。その結果、第二次世界大戦という悲劇に突入したという形で、ある意味では日本論としての鎖国論という議論もあったと思います。

そういう点で日本とヨーロッパを対比しながら、日本のアイデンティティを議論する。それは②アジアと日本という議論に関係したと思います。例えば明治期の福沢諭吉の「脱亜」という議論も、日本はアジアとは違うのであると、アジアと区別することによって、日本のアイデンティティを考える。ある意味では文明論としてのまだ低いアジアと、西洋を目指して発展する日本という対比で、アジアと日本という中でアイデンティティを議論するという動きが明治維新以降あったと思います。

さらに①アジアの中の日本。より長い歴史の中では、例えば江戸時代までは、あるいは鎖国までは、アジアの中の日本という形で、日本をアジアの中に位置づけて、ある意味では中国との交易、あるいは東南アジアとの交易、これは後に申しますが、アジアの中の日本という文脈でなされた議論です。

この①のアジアの中の日本という、長い歴史で日本を議論するときにはアジアの中に位置づけ

る。これはよくいわれることであると思います。②のアジアと日本という形では、近代以降の日本の方向として、アジアで近隣諸国とは違う日本を考えていくということであったと思います。

③のアジアとしての日本という考え方。これは表現としては必ずしも明確ではありませんが、アジアの中の日本であれ、アジアと日本であれ、日本は、およそ6世紀以来、明朝・清朝に至るまで長期にわたり、中国を中心とした広域地域秩序、朝貢冊封体制、あるいは皇帝の持つ広域地域に対する影響力から自らをどのように離すのかという課題があったと思います。そういう華夷秩序、華夷思想、あるいは中華思想に対して、明治以降の日本知識人は、アジアという概念、アジアという表現をして区別したり、ときには対抗しようとしたりしました。

アジアという言葉自体はもともとギリシャが小アジアという現在のトルコの地方に対する異土としての地域性を表現した言葉でした。アジアの知識人がそれまでの中華に対して、東洋という表現を用いたり、さらにそれに加えてアジアという言葉積極的に、これまでとは違う、清朝皇帝を批判する主体としてのアジア、ヨーロッパと対峙する主体としてのアジアという角度から組み替えたアジアとして、換骨奪胎したり意味転換をおこなってきました。ですから、アジアをめぐる議論は大変多く、また複雑であったと思います。

それから、アジアという概念には実態がないのではないか、アジアという実態はあるのかどうか、むしろアジアというのはイデオロギーではないか、思想ではないかという両極端の議論を中心として、その間にさまざまに多様なアジア論があったと思います。

歴史的にいろいろなアジア論があって、日本の明治以降の知識人は、中華あるいは華夷秩序に対抗するものとしてアジアという理念を提出して、それを場合によっては非常に拡大したり、それに加えて軍事力や戦争を論ずるという形で、アジア主義、大アジア主義へと展開する局面がありました。③アジアとしての日本、日本がアジアとどうかかわるのかということの中での日本のアイデンティティ、日本論、日本人論を議論したという、①～③の三つのタイプがあるのではないかと思います。

これまで①番と②番は普通の形で議論されますが、③番はアジア主義、大アジア主義、あるいは大東亜という形での、ある意味では膨張する日本、軍事的な日本を批判的に言うために議論されてきたようにも思います。私は、日本の明治以降の知識人の、アジアという理念を掲げながら東アジアとどうかかわろうとしたかという問題は、中国を中心とした華夷思想、華夷秩序からどのように離脱しようとしたか、その中でそれとどう対峙しようとしたかという格闘を見ることができるように思います。

このことは、もちろんアジアの内実、あるいはアジアのとらえ方には大きな変化がありますし、戦後とりわけ現在の東南アジア、ASEANという問題、あるいはASEAN+3、ASEAN+6というような新しい地域構想の中でアジアもまた適宜新しく使われている、あるいはむしろ絶えず作られているように思います。

<中国・韓国からのアジア論>

私が現在注目しておりますのは、中国においてアジアというのはどのように議論されるのか、あるいは韓国においてアジアはどう議論されるのかという文脈の中で、日本がもう一度アジアということの中で自らのアイデンティティ、アジアと切り離す日本としてではなくて、アジアの中に日本のアイデンティティを考え直すという、アジア論をどのように考えたらいいかということに関心を持っているわけです。

中国については、グローバリゼーション、地縁政治、ジオポリティクスということでありまして、歴史的に見ますと、先ほど金先生のお話にもありましたように、皇帝は世界、宇宙ですから、特にアジアという地域を別個に議論する必然性はなかったわけです。もうその中に入っているということになりますから。むしろその後、20世紀初頭に中華民国を作るときに、中国という名前をどうするか。中華では広すぎる、南京では狭すぎるというような形で、主権とその領域、理念のずれに梁啓超や譚嗣同などの知識人は格闘したわけです。そういう背景はあります。しかし、アジアという議論は必ずしも中国の中では必要でなかった。したがって、現在中国の知識人の中でアジアを議論している孫歌さんたちと議論していきたいと思います。そしてその議論の流れはむしろこれから大切になってくると思います。

韓国の場合も近代アジアを議論することは、むしろ帝国、植民地ということが今までは前提になっていたの、韓国として、あるいは韓国知識人としてアジアというのは必ずしも議論されてこなかったわけです。けれども最近、延世大学の白永瑞（ペク・ヨンソ）さんなどのように、むしろ植民地近代など近年の地域変化のさまざまな議論を基に、韓国の歴史の中で、中国に対して、あるいは日本に対して、むしろアジアや東洋という視点から問題をどう考えることができるのかということも一つの韓国のアイデンティティとして議論が進められていると思います。

<東洋史の登場>

先ほど日本の知識人のアジアとしての日本という場合に、私は東洋史という新しい学問が19世紀末から20世紀初めに京都大学で制度的に初めてできるわけです。今でこそ東洋史といいますと、古くさい学問のようにも聞こえますし、中国が中心である学問にも聞こえますが、当時は東洋史という学問は、むしろそれまでの漢学を中心とした、当時は支那学と呼んでいましたが、漢学を中心としたアジア論、アジア認識ではなくて、例えば桑原隲蔵先生が書かれた『蒲寿庚の事蹟』という中国のムスリム商人であった蒲寿庚について書かれた本は今でも中国の研究においても古典となっているものです。注釈・解説部分が本文の数倍ほどあるものです。私も学生のころ授業で、これこそ本を書く理想的な形である、本文は簡潔明瞭で、注に自分の意見を盛り込むのだということをゼミで何回か伺った記憶があります。

そのように、例えばアジアをイスラムの問題として、あるいはモンゴルの問題として、あるいは中央アジアの問題として、それまでの中心であった漢学・支那学に対してむしろそれを相対化し、東洋史という形でアジアの地域をつなげていくという東洋史という学問ができました。

同時にそのことは、日本のアジアの中での歴史を、むしろヨーロッパの文明や進歩の基準に置き換えるという文脈、とりわけ日清戦争の後、歴史の基準を戦争と国際商業という二つの問題で、その国がどれだけ発展しているかを見る基準であるという、一つの近代国家史の判断が導入されるわけです。

その全体的な環境としてのアジアをより地域として見ていく、アジアをより広く考えていくという形での学問の中における、アジアとしての日本、あるいは日本がアジアをどう考えるかという点での知的な格闘があったと思います。

<アジアを地域研究する>

先ほど実体のアジアか、イデオロギーのアジアかという問題を出しましたが、むしろこれからアジアを地域研究するという観点から、多ディシプリンのもとで複合的に地域を全体として考え

アジアを地域研究すること

① アジアの地域と海域

② 歴史と現在

③ アジアの地域性を考える

図表 3

る、全体として理解する、かつ現地研究を中心に考えるという形で、アジアの地域研究を考えようとしています。私は今、東南アジア研究所にありますが、東南アジア研究所は地域研究を考え方や問題への接近の基本に置いています。地域研究はさまざまなディシプリンをそこに総合します。東南アジア研究所自体、医学、農学、人文社会科学といろいろな領域の研究者が集まっているわけです。

これからのアジアの議論は、もちろんアジアを研究する、アジアを議論するということですが、もう一つ、アジアを地域研究するという形で問題を進めると、これまでとは異なる問題として何が浮かんでくるのか、あるいは、よりローカルな意味での地域性を持ったアジアと同時にグローバルな地域の中でアジアを考えなければいけないということが課題として出てくるのではないかと思います（図表 3）。

その点で、①番として「アジアの地域と海域」と書きました。私は特に海域という問題からアジアの特徴を考えてみたい。また、海域という問題は物事をつなげていく一つの歴史であって、国と国がつながるはるか以前から物のつながりや人の動きによって、つながっていました。また、アジアの海域は世界のほかの地域と比べても、はるかに複雑で、はるかに込み入っていて、その意味で、逆に陸の主権だけではなく、海の主権を議論し始めた瞬間、それはうまくいかないということがはっきりするほどの一つの相互依存性を持っています。アジアにおいては、主権の重層性や海域の共有性を考えない限り、直ちに壁にぶつかってしまいます。

第②の「歴史と現在」というテーマは、中国が地縁政治という形で、あたかも歴史を呼び戻している、あるいは歴史を背景に負いながら現在を示そうとしているように見えるところもいくつかあります。事実、南沙群島という南シナ海の島嶼群とその海域は中国、台湾、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、マレーシア、ベトナムなど七つが込み入っているところです。

また、中国はベトナムに対し、歴史的には中国の朝貢国であったことから、現在、海域の領有権を主張する歴史的な根拠がないという形で、歴史の議論を導入しています。

それから、朝貢外交という形で、これはやや象徴的な使い方ですが、ある意味では中国の影響力の大きさを周辺地域に対して表現する場合もあります。また、非常に積極的なメコン川流域開

発の事業もあります。あるいは、人民元が中国から実際には周辺地域にしみ出しています。中国と人民元による決済が東南アジアの国境貿易でできる。香港においても人民元の預金ができるということは、特に経済的な側面で見ると、人民元が中国という中だけではなくて、周辺地域にもその影響力を持っているということもあります。

このように積極的に歴史的な資源を動員しながら、現在の中国が対外関係を強調しようとしているということがあります。

その中でも特に海域については、これまで閉じた中国でしたが、今は開いた中国ですから、積極的に、例えば海南島を海南省という形で一つの省に格上げして、南シナ海に対する前進基地という位置づけをして、ある意味では海洋政策を積極的に展開しています。とりわけ 1990 年に国連海洋法を批准した以後は積極的です。この海洋政策は、海洋の経営と非常に密接に関係して、沿海の海域一帯を地方自治体に貸し出すという形でも、海域の経営をしています。

そのことは単に交通・交易の場ということだけではない海洋の使い方があるわけです。当然、海底資源は戦略的に非常に重要なこととして近年大きな懸案となっています。中国から見ますと、今、海洋政策はこれまでにない非常に積極的な政策領域であり、ここにおいても中国の中の地域間相互の競争というものも非常に激しくなっているといえると思います。

全体として地域性を考える。これは③アジアの地域性という場合に、例えばアジアは多様であり、中国も多様であるということは、私たちは経験的にも観念的にも理解していますが、そのときに、他方では、必ず日本は一つの日本であるという議論が続きます。私はこの非対称性にとっても引っ掛かっています。むしろ日本も日本の地域性を考えるとどうなるか、日本の各地域それぞれ独自にアジアとのつながりを持っているということを見出すことも、これから一層重要になると思います。

例えば、関西地区はアジアに近いということからアジアの動きに大変敏感です。歴史的にも非常に結びつきが強い。また、現在でもアジアからの訪問者は、関西の歴史を見に来るという中で交流があります。さらに、日本から外国に出ている人の相当の部分は関西の人が多いと思います。これは限られた範囲の経験的なアンケートですが、そういう点で、日本の地域性の特徴に基づいたアジアとの交流・交渉を支えることになると思います。

日本とアジアという対比の日本も、日本の地域性に基づくアジアとの結びつき、例えば九州は九州独自のアジアとの結びつきがあり、沖縄（琉球）は沖縄独自のアジアとの結びつきがあるということを考える必要があると思います。日本も地域に分解しながら、適切なアジア交流、特に西日本の持っているこれからのアジア交流の重要性ということを考えていかなければいけないと思います。

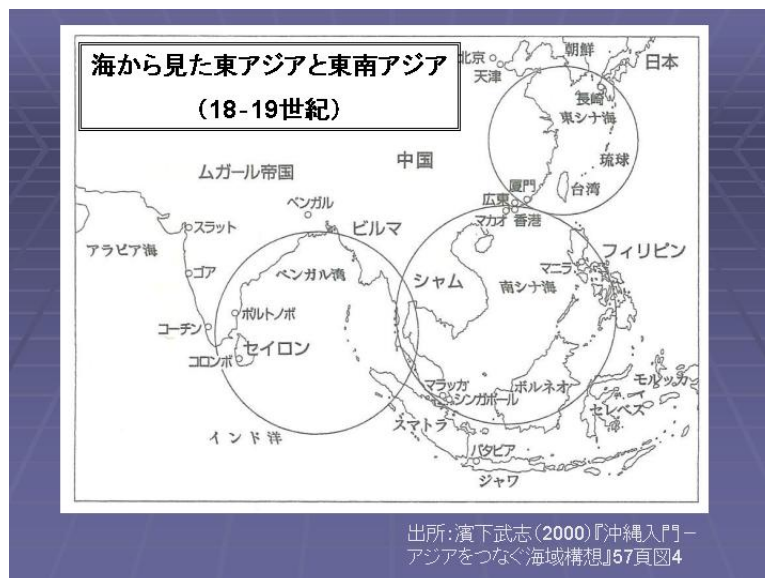
<アジアにおける海域の連鎖と交錯>

この地域間交流の視点を、地図に基づいて、海域アジアという問題として考えてみたいと思います（図表 4）。アジアの大陸部、半島部、島嶼部の間に海が北から南にずっとつながっています。北のオホーツク海から始まり、日本海、これは韓国では東海と呼んでいます。それから黄海、東シナ海、南シナ海、タスマン海に至るまで海の連鎖といえます。西の方に南シナ海からベンガル湾に、そしてインド洋につながっています。

アメリカ南北大陸、インド亜大陸、アフリカ大陸を見ましても、大陸部と半島部、島嶼部がアジアの海域の連鎖の形のように、海を挟んで構成されているという地域はないと思います。地中



図表 4



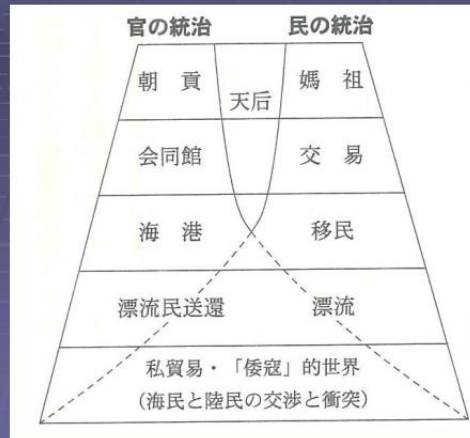
図表 5

海が比較的近いわけですが、地中海を根拠としたスペイン帝国史を明らかにしたブローデルの議論から海洋の歴史論が盛んになっていますが、アジアの海は、その規模や機能においても地中海をはるかに凌駕しています。

アジアの海域の連鎖は、南北、東西に非常に密接なつながりを持った連鎖になっています。この海をもう少し考えます。東シナ海と南シナ海とベンガル湾の相互関係を考えたいということです（図表 5）。

東シナ海と南シナ海の交差するところに、歴史的には唐の時代以来、広州があります。それを1842年から香港が肩代わり、吸収するようになります。南シナ海とベンガル湾の交差するところにはシンガポールがあります。歴史的にはマラッカです。そのような形で、海洋都市あるいは海港都市を考えると、海域と海域のちょうど結び目に非常に重要な移民都市、交易都市、金融都市ができてくるということに気がつきます。

海域統治の五層構造



出所:濱下武志(2000)『沖縄入門ーアジアをつなぐ海域構想』89頁図8

図表 6

琉球の交易ネットワーク



出所:沖縄県教育委員会『歴代宝案の栞』14頁

図表 7

そういう点で、現在の東南アジアはある意味では、南シナ海をめぐる一つの資源、人の交流、物の交流としての位置づけ、あるいは東シナ海は歴史的には長崎と寧波の交易、琉球と東南アジアの交易、琉球と福建の交易など、海をまたいだ地域のつながりというものが歴史的に非常に盛んであったということで、現在の陸を中心とした、しかもその上に国家という一つの政治権力を置いた形とはまた異なる「海域のアジア」という特徴を持っていると思います。

<海域統治の5層構造>

先ほど倭寇のお話がありましたが、海洋の使い方というのも幾つかの層になっていると思います(図表6)。民間の使われ方、それに対して官が介入して、地方権力が沿海地域にどういう形で力を及ぼすのかということも歴史的にはあったと思います。

中国の東南沿海から日本あるいは琉球にかけて、媽祖という海の守り神があり、これは官制の



図表 8

貿易である朝貢貿易、あるいは官の関係である朝貢関係を通じた海の管理に関係します。そういうもとで、交易が行われ、移民が行われ、漂流が行われ、そして海民と陸民の交渉や衝突が行われる。括弧付きの「倭寇」的世界ということで、民族的に倭がどうかということではなくて、海民と陸民の一つの交渉の領域があったと思います。こういうところに官が介入していった、特に海の守り神の媽祖という民間の女性の神様に、皇帝は天后や天妃という爵位を与え、それによって格を非常に上げるわけです。そういう形で沿海の政治に介入していくことがあります。

目を惹かれることは、海を通じた交易のネットワークの広がり、私たちの今の想像をはるかに超えています。琉球の歴史を考えてみますと（図表 7）、琉球は現在の東南アジア、ジャワ、マレーシア、タイ（シャム）、当時のアユタヤですが、そこまで、胡椒や蘇木（そぼく）という赤い染料の原料を取りにいく。そして、それは朝貢品として琉球は中国の福州に持っていき、朝貢使節として北京まで行きます。この琉球の朝貢貿易船は福建で造られ、東シナ海、さらには東南アジアにまでつながっていく福建の華僑商人のネットワークで、琉球王朝は久米村に中国からの移民の人たちを朝貢貿易の担当者として住まわせて、この朝貢貿易を行いました。

<冊封使と朝貢貿易：海域を跨いだ地域システム>

図表 8 は先ほど金先生のお話もありましたが、中国から琉球国王を認知するためにやってくる冊封使の行列で、数百人規模です。現在、沖縄といいますと、所得の問題その他で、周縁というある格差をシンボライズしますが、歴史的には海という面で見ますと、日本と中国のちょうど間にあって、その両者をつなぐ役割をしていたということがあります。

図表 9 はバンコクのワット・ヤンナワーというお寺にある、仏塔船、あるいは龍頭船です。シャムの地方の役人が歴史的な貿易船を仏様に見立て、仏塔を中に立てて寄進したものです。こういう東南アジアからのいわゆる唐船というものもありました。

図表 10 の蝦夷錦は、中国の生糸の織物に刺繍した衣装で、これを着ているのは西蝦夷のル・モッペ首長のコタンビルという人であるということです。満州靴に近いものを履いていますし、こういう形で中国生糸の東アジアにおける大きな役割を見ることができます。先ほどの西陣も、独

シャムの朝貢船 (模型)



図表 9

蝦夷錦を着る アイヌの首長



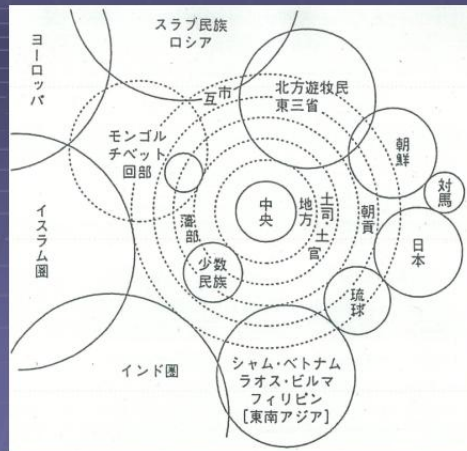
出所:北海道開拓記念館(1996)『第42回特別展:山丹交易と蝦夷錦』40頁

図表 10

自の絹織物を作ることによって中国生糸の代替品とするという、輸入代替工業化を中世の時代にすでに行ったという議論もできるかと思います。

東アジア地域秩序という視野は(図表 11)、中国、日本、韓国として国別・民族別に分けられるというよりも、むしろ大きな地域秩序として、ユーラシア大陸の東半分、あるいはそこから海の連鎖を通して、海の連鎖の外側にある朝貢国が海の交易を利用する形で中心部と交易を行う。この中心部が閉じたり開いたりすることに応じて、交流を行うという形で、この地域秩序は大きな分業関係に歴史的になっていたと思われます。大陸部が開放するか閉じるかということによって、周辺部は自らの特徴を形成してきたといえると思います。

中国と周辺関係(清代を中心として)



図表 11

香港の多角的 後背地関係



図表 12

<海域に広がった香港の多角的後背地関係>

中心・周辺という形で地域秩序を問題にしましたが、このことも海洋の交易のネットワークを考えますと、地域間の地域連関、ネットワークが国を単位としたものとしてではなく、海洋交易の担い手、中継地、海洋都市の連携という形で構成されたネットワークの地域関係と見るができると思います。

図表 12 は、海洋都市あるいは海港都市を香港中心に考えてみましたが、19 世紀以降、近代に入りますと、海港都市の役割がより求心力を持って結びつくようになります。現在にもつながりますが、中国の東南沿海における香港の役割は、香港が 97 年に中国に復帰しましたが、依然として金融交易都市としての役割の特徴は持っています。

次に、フィリピンとの関係、あるいは台湾との関係。東南アジア本体、これは華僑・華人のつながりの中心部です。それから東南アジア北東部、中国の西南部（四川省、雲南省、貴州省）ともつながりを



図表 13

持つという形で、香港のヒンターランド（後背地）とは、むしろ交易都市だけではなくて、地域関係の結び目という形を取っていくと思います。

図表 13 はよりいっそう複雑で、例えば、近代国家ができ上がってきますと、このネットワークがより北に動いていくように思います。日本と東北沿海、香港との三角関係、また特に上海との結びつきが強くなってくる。それから、揚子江内陸部が外側沿海線と接して、ちょうどT字型の中国の経済発展地域の構造ができるようになります。

このように中国の沿海が海をまたいで東アジアと絶えずつながっていたという歴史があるわけですが、これも大陸部と島嶼部、半島部が共に一体化するほどには近くなく、また非常に疎遠であるほど長距離ではなく、歴史的には、1～2週間で行き来できる東シナ海を活用したところからでき上がってくる東アジアの地域関係が海域関係として存在していたという特徴がこの背景にあると思います。

<国家による海域の分断>

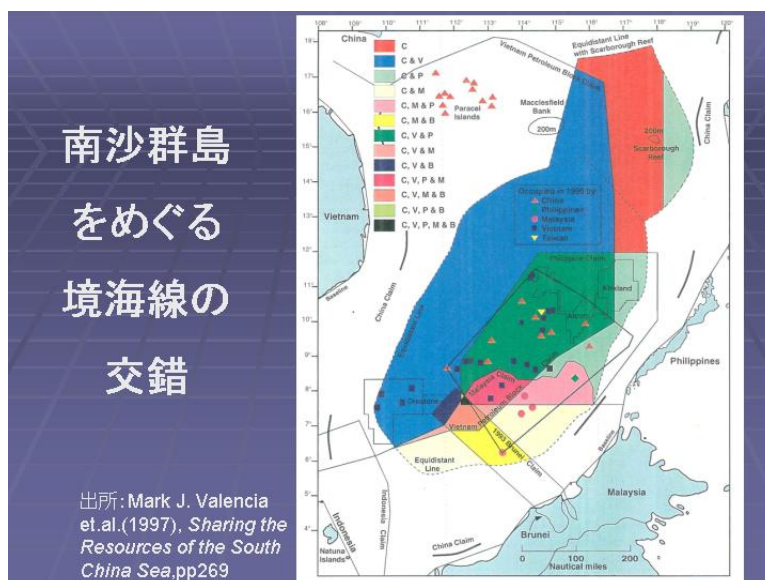
現在の海洋法では、国家が海域に張り出していくという考え方で、海域は原理として公海と、沿海国家の延長としての領海、排他的な経済水域、大陸棚の影響という形で幾つかの基準で、国が海に対してせり出していきます。国が海にせり出して行っているようすが**図表 14** で、特に南シナ海の一部が西沙群島、東沙群島、南沙群島です。南沙群島が中国、台湾および東南アジア、フィリピン、ブルネイ、マレーシア、ビルマ、インドネシア、ベトナムが共同でぶつかり合う場であるということは、90年代末期に衝突事件として典型的に現れましたが、江沢民首相がこの問題は後代に解決をゆだねるという形で棚上げしました。

しかし、海域という問題から考えてみますと、この濃い線は海岸線で、海南島、それからインドシナ半島がありますが、大陸棚、西沙諸島を一つの中国領土として、今度は島から海に領海がせり出していきますから中国の影響力はここまですっと入ってくることになります。この西沙群島の一つの排他的経済水域に展開する海域はこういう形で広がっていきます。

図表 15 が南沙群島の島嶼関係をめぐる一つの係争の地図です。先ほど言いましたように、中国、台湾、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、ベトナム、インドネシアの7か国がそれぞれに主張していま



図表 14



図表 15

す。問題は海へせり出していく領海の部分（12海里）と200海里の排他的経済水域、それから大陸棚です。これは計算によって違いますが、条件としては大陸部がすべての大陸棚への影響力を主張した場合には、周辺部は大陸棚問題としては積極的に対応する根拠がない、つまりお手上げであるということが今の国連海洋法のルールです。

島嶼をそれぞれの国が占領しますと、そこから今度は逆に外側の海に向けた領海の主張が始まります。このことはもちろんそれぞれの根拠がありますし、だれが早く居住したか、どちらに早期の歴史的記述があるかなどという幾つかの異なる歴史的な根拠、それに実際に経済水域の中にあるか、あるいは海底資源をめぐるさまざまな異なる基準の問題を根拠にして論争があります。もちろんこれは国単位で、国を主体として交渉するという手だてしかありませんが、現実にはこれだけ入り組んで、お互いに組み合わせられてしまい、それぞれが主権の線を主張したとき、この場合には海域を問題にしましたが、東アジアにおける主権国家で、主権国家の排他的単一性だけを主張していきますと、恐らく何一つ問題は打開

できないであろうという側面が、例えばこの南沙群島の島嶼の占領をめぐる7か国間の紛争、対立の中から見て取れるように思います。

そういう点で、私たちは、確かに国連の規定にありますように、主権国家が排他的に領域を主張できる、あるいは水域を主張できるということはルールとしては分かりますが、まず歴史的な機能として、そのように進んでいていないほど重なり合っているという事情、それから理念としても、海が持っている共同利用の場を画分しようとして、国がそれを細切れにして自らの領域として主張するということは非常に非現実的であるという問題など、歴史的にも問題が限界に至っている局面を海域の中にも見るることができるように思います。

海域の問題の議論をつながりから始めて、ネットワークの地域関係として考えるという中に、主権の縦割りが入ったときに、私たちは現在、東アジアにおける国家主権の問題をより歴史的に考えながら、それに対して、より多様性、重層性を付して利用・活用できるような議論というものはできないだろうかということが歴史的にも現在にも考えられるわけです。

その場合に沿海都市のネットワークという形で、確かに海が地球の表面の72%ほどを占めていますから、地球は水球に近いわけです。しかも、沿海都市に住んでいる人口が半分以上、地域によってもっと高いところがありますが、沿海都市の人口が非常に多いのです。もちろん農村地域という大きな問題は残されますが、沿海都市の環境問題、都市生活の問題、経済力の問題などは、東アジアでは非常に類似したものを抱えていると思います。

<おわりに：沿海都市ネットワーク形成に向けて>

そういう点で、バルト海沿岸120余都市の沿海都市ネットワークなどの例にも見られるように、沿海都市のネットワークを、国家の縦割りの構成に対し、社会のほうから、民間のほうから、あるいはネットワークのほうから考えていくことが議論される必要があるのではないかと。それが日本とアジアではなくて、むしろお隣どうしのアジアという観点からどのように考えるか。ただ、日本の場合には、流動的な大陸部に対応することとして、明治以降、非常に厳格に制度化、法制化、組織化という形で社会を作ってきました。今後、大きく流動する社会、あるいはアジアあるいは世界に対して、ネットワーク的なかわりというものをどう考えていくか、そういうネットワーク的なつながりを日本の社会、あるいは社会活動のなかで新しい主体として組み替えていけるのかどうか。また、組織化され制度化された日本社会が、果たして改めてそれを目標としたほうが良いのかということは、現在、答えが出るものではないと思います。ただ、環境状況が多様化し、変化している中で、日本社会としても日本の地域性の持つ特徴、例えば明治以降の緊縮財政を採った藩と富国策を採った藩とはその後の展開が異なっており、その違いが今また登場しているともいえる局面もあります。その中で、それぞれの地域に根ざしたお隣どうしのアジアという観点から問題を考えていくことができるといいのではないかと考えています。